

エコー ル マ テ ル ネ ル
フランスの幼稚園：L'école maternelle [母性的な学校＝幼稚園]
—過去，現在，未来—

ミッシェル・ソエタール（アンジェ・カトリック大学名誉教授）
翻訳者 小笠原文（広島文化学園大学 准教授）

L'école maternelle [母性的な学校]（以下『幼稚園』と訳す）は、フランスが自慢できる特殊性をもっている。したがって、フランスの学校制度の組織について情報収集したい国外からの視察者は、まず幼稚園の視察から始めることが多い。この短い論稿ではフランスの幼稚園の歴史的な始まり、その活動源となる精神、そして対峙しなくてはならない新たな問題点について紹介したい。

歴史的な始まり

フランスの幼稚園の創立はポーリーヌ・ケルゴマル P. Kergomard (1838-1925) 女史の名前と結びついている。それはジュール・フェリー (J. Ferry) 大臣のもと、フランスの学校教育制度が策定された時代であった。小学校の校長であり、彼女同様にリベラルなプロテスタントであるフェルディナン・ビュイッソン (F. Buisson) に勧められ、ポーリーヌ・ケルゴマルは『保護施設』の総視察官のポストに就く。これら『保護施設』には小さな子ども達が押し込まれていたが、そこではかれらの発達に特に配慮することもなく、キリスト教の教理問答書の暗唱と厳しいしきたりと教訓を叩き込むことだけを目標としていた。ポーリーヌ・ケルゴマルはこれらの受け入れ施設を母性的な学校 (écoles maternelles) に変えようとした。そして1881年、école maternelle (母性的な学校＝『幼稚園』) という名称が公認のものとなった。彼女は膨大な記事を発表し、多数の講演を行った。それらのテーマは組織について、教育法について、そして新しい学校の設備についてなどであり、とりわけ小さな子どもの教育者を駆り立てる精神と信念についてであった。

こうしてポーリーヌ・ケルゴマルは共和国の幼稚園を築き上げようと腐心した。しかし幼稚園は家庭の規範と学校の規範の移行を司る存在だという考えから、構築される教育制度のなかに、教育の自治権を主張した。プログラムが作成され、総視察官および県視察官の制度が制

定され、園長と副園長は小学校教員に相当する免状を持った。園の具体的な設置条件が再考された。例えば、施設備品は「保護施設」の床に釘付けされたものとは違った、可動性の机や椅子を使う。子ども達はセクションに分かれて入園し、各セクションでさらにグループに分けられる。ひとつ公立の幼稚園の収容人数は150名を超えてはならない、等々。

小さな子ども達へ新たな体育教育、知能教育、道德教育をおこなうための様々な授業の詳細なプログラムが明記された。この総記述にはタイプ別のふたつのセクションそれぞれに特殊で詳細な授業プログラムも付記されている。例えば体験授業、日用品についての知識、博物学の初歩的な知識などは、年少組に最適か、年長組に最適かということなど明記されている。そして文中、「とても簡単な談話」「非常に基本的な概念」「練習」「家族同様に親しい対話」が重要であると繰り返し明言されている。

小児の死亡率が依然として高かったこの時代、特に重要視されたのが、子ども達の健康管理と衛生管理への尽力であった。ポーリーヌ・ケルゴマルは、したがって医療検査、各幼稚園への保健室設置、更衣室、食べ物、手洗いの徹底、頭髪の衛生、等々の規定を増やしていった。幼い子どもたちの教育は男女共学であった。

フランスの幼稚園はその創立者ポーリーヌ・ケルゴマルの時代から、いちじるしく変遷していったのだ。小さな子どもが成長するひとつの人格としてとらえられ、おとなによる教育的配慮がふさわしい文化的な存在としてみなされるようになるにつれて幼稚園は普及していった。フランスにおいて2歳から5歳の子どもの就学率は1945-6年で27%であったのが、1994-5年で84%までになった。以降、エリック・プレザンス (Eric Plaisance) が記しているように、「幼稚園はもはや貧しい家庭の子ども達のための衛生避難所ではなく、あらゆる環境の家庭が求める教育の場として、事実上定義されるよう

になった。」もうひとつの進展としては幼稚園教員の職業基準と身分規定の変化があげられる。幼稚園の教員と学校教師の地位の同格化がなされ、同じ給与、同じ週間就業時間、休暇も同じである。また次第に幼稚園教員の専門化が顕著にみられるようになり、幼稚園教員はもはや「賢く献身的な母親」モデルでは定義しがたく、「科学的な」心理学や教育学の能力を備えた専門家としての呈をなしている。さらに幼稚園の創立とその精神の発展に見過ごせない他の変化もある。幼き日の幼稚園の「お母さんのような」先生は、「お父さんのような」先生である可能性もでてきたのである。

幼稚園の精神

幼稚園の精神は1882年7月28日のデクレ（行政権力による文書化された決定）の中にその全てが縮約されていると言ってよい。「幼稚園は言葉通りの学校ではない。ここは家庭から学校への通過地点であり、家庭の優しさや愛情、寛大さを持ちながら、学校での学習や規則について指導していく。したがって、幼稚園長は進んだ教育がなされた子ども達よりも、学ぶということに対して準備が整った子ども達を小学校へ送り出すことを配慮するべきなのである。」これはまさにポーリーヌ・ケルゴマルの考えそのものである。

このようにフランスの幼稚園は、明確に異なるふたつの伝統に根ざしているということがわかる。ひとつ目の伝統は母なる教育者と家族の規範に基づくものである。このモデルの根源はキリスト教のイメージ「聖家族」に見ることができ、その教育学的発展は幼児教育学者を通して理解できるであろう。まず、コメニウス（J. A. Comenius, 1592-1670）と彼の『大教授学』の中に出て来る「母性的な環境の学校計画」が挙げられる。重要な哲学的局面ではジャン・ジャック・ルソー（J. J. Rousseau）の『エミール』であり、誕生の瞬間から子どもの発達にともなうべきだという「感覚的理性」の認識であろう。次にペスタロッチー（Pestalozzi, 1746-1827）が登場し、『母の書』を書き、「ゲルトルート」に具現された教育的であると同時に優しい母を中心とする「居間 ^{ボーンスタube} Wohnstube」を常に引き合いに出す。ドイツの教育学者フレーベル（Fröbel, 1782-1852）についても言及すべきであろう。彼の「幼稚園 ^{キンダーガルテン} Kindergarten」は本来、母親達が教育の手ほどきを受けるために集まる場所

であった。しかし文化的、歴史的な理由からポーリーヌ・ケルゴマルはドイツのフレーベルよりも科学的でありながら母性的なモデルを唱えるイタリアのマリア・モンテッソリー（M. Montessori, 1870-1952）を好んだ。フランスの母性的な学校の創立者ケルゴマルは、ひとつの教育学の規範に囚われないということを課題に、あちこちからかき集めて彼女の考える幼稚園をなした。

このようにして彼女は子どもにふさわしい教具（モンテッソリー）、手作業と実物教授（ペスタロッチー）、そしてとりわけ遊戯と遊具（フレーベル）を幼稚園の教育法に組み入れていったのである。ケルゴマルは特に遊戯こそが機械的で厳しいしつけと軍隊のような訓練のみの保護施設と幼稚園とを最も明確に断絶するものと見なしていた。一方で、彼女は「自由な遊び」が幼稚園のプログラムの一部になくてならないとし、とくに最年少組ではプログラムの要であるべきだとする。子どもは家庭の中で、何も無くても結局は一人で遊び、どんなものでも遊具にしてしまえる。それゆえに、学校の中でもこの自発的な活動を活かすべきである。彼女はこう記述している。「遊び、それは子どもの仕事です。それは子どもの職業であり、生活です。幼稚園で遊ぶことで子どもは学校生活への入門準備が徐々にできるのです。遊びながら子どもは何も学べないと言えるものでしょうか？」具体的にこれは何を意味しているのでしょうか？まず幼い子どもが幼稚園に自分のおもちゃを持って来ることを認めなければならない。そのおもちゃは新しい概念を得るための、そして子どもたちが自分に対して、他者に対して起こす行動を観察するための「教育的な道具」を生み出すきっかけとなる。どんな物でも遊具になりうる。段ボール箱、砂、古いコップ、スプーン、人形を作るためのぼろきれの束…このような非常に実用主義的な立場をとることからも『『フレーベルの遊具』や『モンテッソリーの教具』はあまりに厳格すぎて、子どもの率直さや想像力に答えきれていない」というポーリーヌ・ケルゴマルの言外の考えを伺うことができる。

そしてふたつ目の伝統、つまりフランスの幼稚園は「共和国学校」の継承者である。プラトンとその「知の国家」にまで遡る必要はなく、ここではフランス革命とこの革命が制定したいと望んだ学校教育モデル、つまりコンドルセ

(Condorcet, 1743-1794)の思想まで遡らなくてはならない。フランスのデカルト主義の良き伝統のなかで、なによりも強調されたのは、万人の知 (savoir) と知識 (connaissance) だった。そして第三共和国の教育相ジュール・フェリー (Jules Ferry 1832-1893) はこの理想を教育制度の実施に反映し、全ての国民の教育は義務であり、無償であり、無宗教であることを保障しようとする。その対象を幼い子どもたちにまで引き下げることにより、ポーリーヌ・ケルゴマルの業績は、このジュール・フェリー・プロジェクトの一環をなすことになった。ここでケルゴマルは哲学者アラン (Alain, 1868-1951) のインスピレーションをある程度、想起している。それは教育成果における家庭の限界とその不足を取り繕うための学校教育機関の必要性を主張したものであった。アランによれば、学校のみが本当に教育することが可能なのだ。

ポーリーヌ・ケルゴマルは、新制度の特徴を守って行こうとしたが、初期段階の幼稚園ではこの特徴をとりはずすべきだとした。新制度において、介入する女性は養育者というよりは教諭であろう。そのために彼女たちは、合目的性をともなった固有の教育実践を行わなくてはならない。しかし幼稚園を初等教育の準備授業にしてはならないのだ。「播種と耕耘を混同して土を耕す前に種をまいたお百姓さんを前にして、教職者や子どもの保護者は何と言うでしょう？」とポーリーヌ・ケルゴマルは論証する。かくして彼女は幼稚園における賞の授与式などの有害性を告発していく。確かに両親というのは我が子が出来るだけ早く、読んで、書いて、計算をすることを学ぶように圧力をかけてくるものであるが、幼稚園こそがその圧力に対抗し、就学的な早熟さが子どもにとって良いことではないと証明していくべきだと説いた。なんとしてでも子ども達を《本による教育》から救わなくてはならない。そして学ぶよりも発育すべき2歳から6歳までの子ども達をまねにして《授業しない》ようにすべきなのだ。

《システム》に対抗し《生活》を擁護するポーリーヌ・ケルゴマルは、幼稚園が機能するのを見たこともないような女性で、《知性的な良識、読書力、子ども達への愛》を持っているような女性が園長としてふさわしいと主張するに至る。「この方法に間違いがなければ、彼女は直感的に家庭の母親がすることをするだろうし、幼稚園本来のメソッドを実践するである

う。」と言っている。これはもちろん極論ですが。要するにポーリーヌ・ケルゴマルが言いたいことは、もし良く出来た本というものがあるのであれば、子どもがまさに《生きている本》であり、子どもを具体的に観察することこそが教育者の行動の基本であるということであった。加えて、幼稚園は子どもたちが自分の欲求を自由に表明できる (例えば自由な遊びなどを通して) 場所であることも重要なのだ。

フランスの幼稚園の将来

以来、この制度はフランスのシステムの中で確立され、しっかりと根付き、その存在を脅かされるということはない。しかし、近年ではその精神を根本的に変えかねない圧力にさらされている。これらの圧力はいくつかの内的と外的な要因が考えられる。

まず挙げられるのは社会的な圧力である。学校というものに常にもっと効率良くと要求し、より機械化した学習などを通して子どもたちが一刻でも早い時期に読み、書き、数えることができることを望む。(この背景にはニュー・テクノロジーの発展が一役買っていることは言うまでもない)。これは止められない社会の風潮である。最善を尽くし、出来るだけ早く有用な国民を育てるという要求。そして子どもの両親自身も社会の渦に巻き込まれ、この要求に縛られていることを考慮すれば理解できよう。

しかしこの性急さの悪影響が見受けられるようになり始めた。こうしたプレッシャーの中で教育された若者たちは、職業的、社会的な合目的性に閉じ込められ、その結果、ほんの小さな職業的な変化にも初めての社会的な混乱にも適応することが出来なくなってしまっている。そして彼らはうつ病、さらには自殺などに追い込まれている。ところで現在の社会 (そして私たちが証人として直面している《危機》も) は、さらに混迷に向かっている。国民はそれに対処する準備が必要だ。最も根本的なレベルでの備え、人間のレベルでの備えである。それはベスタロッチーが実用的な実践前の人間的な《基礎力》と称するものの発達によるものだ。これらの力は、教育の全過程を通して自己発達させるべきであり、先ず年代順としては幼児の過程から早速発達させなくてはならないものなのだ。使える労働者を幼児期から育てようと夢見て、付属幼稚園を創設する企業にみんな微笑む。しかし、企業の脆さを見せつけられて以来、微笑みは悲

劇となり、否応なく唯一の文化にはめられた人たちの運命はどうか。教育は常に基本的な人間性に寄り添わなくてはならない。そして人間に生きる力と職業上の、社会上の失敗があっても立ち直る力を与えるものでなくてはならない。

教育における第一番目の役割は母親によるものであると、ペスタロッチーとフレーベルは認識していた。同時代の彼らは予感していたのだ。女性はもう家に閉じ込められたままではいけないだろう、と。小説『リーンハルトとゲルトルート』の優しきゲルトルートが子どもを教育しながらでもできた家内工業はやがてなくなり、そのうち母親は家庭から出て外での仕事を探さなくてはならないだろうと。この動向は現在では一般化し、逆戻りすることはないであろう。しかし「教育者たる母親」のモデルが崩壊したと言えるであろうか？母親が自分の子どもと少しでも長く一緒に居るために早く家に帰りたがるという意味で逆に強くなりつつあると思われる。母性と共に授かった「賜り物」である教育は、以後母親にとって「使命」となっていくのである。彼女が自由な時間を持てる時、仕事から解放される時、それは子どもの面倒を見る時となり、教育活動を行う時となる。(子どもをテレビの前に見捨てない限り！)ここで母親は、父親もまたこの役目を果たすことができるが、幼稚園にとって教育的な対話を交わすことのできる最適なパートナーとなる。そして幼稚園は学校よりも家庭に立ち返ることによって、その当初の志を取り戻すのである。

さらにもうひとつ「幼稚園の精神」に害をもたらしかねない変化は、教員の拡大した専門化への過程である。それは教職の技術化、さらには「外」から押し付けられた(このような場合は国家によるものであるが)目的への服従を引き起こす。流行は確かに「能力」の特定化や「成績」評価で子どもたちを査定している。しかしこの風潮も逆転傾向にある。教育すべき実体は、能力の十字路だけではなく、なによりも可能な限りの調和を持って発達していくことを望み、さらにはこの発達によって自分の能力を自分自身で創りだしていくことのできる個人である、と人々は次第に気づいてきた。たとえ学校教育がさらなる専門化の道を辿ろうとも、単位としての個人をまもることが大切であり、この個人こそが教育の初期の段階から守られ、尊重されるべきであると人々は次第に理解してき

た。

ここで適応というものが必要になってくる。ポーリーヌ・ケルゴマールによって提言され、幼稚園と小学校の区別を堅持しようとする配慮は、同じシステムから出発し、「子どもの育成」という同じ目的に向かって仕事をするこれらふたつの機関を切り離す結果となった。しかし子どもの形成は連続性の中で行われるものであり、まず「生活の学校」、ついで「知識の学校」になるというわけではない。学校というのは実生活と関わりを持ちつつ、知識を発達させていくべきものなのだ。そこで行政的な解決は、フランスの教育システムの中にこのふたつの機関をつなぐ「実習過程」を創設した。その第2過程が「基本的な準備学習」課程であり、幼稚園から小学校への移行を保障するというものであった。このようにして、幼稚園の教員は目標を小学校の教諭と共有してふたつの考え方を結びつけなくてはならなかった。小学校にとっての利点は知識と生活との関わりをいま一度見直す機会となることであり、幼稚園にとっての利点は学校枠で生活自体は鍛えられないが、生活が知識の獲得に役立つことを喚起することである。

お分かりのように、この制度的な競合関係の背後にあるのは、まさに自然と教育をめぐる大きな論争に他ならない。そしておそらくこの論議からぬけ出せるのは、お互いに対極にあってイライラするのではなく、それらを良く考え抜かれた方法で上手に関連づけすることができることだ。そのために、教育学の思考が確立されなければならないということである。

Michel SOETARD

ミッシェル・ソエタール名誉教授 略歴

1939年11月29日、ベルギーのヴェルヴィックにて誕生 (69歳)

アーズブルク (ノール県) にて中等教育 (ラテン語, ギリシャ語, ドイツ語) を受ける。
1957年6月にバカロレア取得。

リール, パリ, フランクフルトにて高等教育を受取る

1962年6月 ドイツ語学士取得

1959年10月 ギリシャ語中等教育免状取得

1961年10月 哲学史中等教育免状取得

1959年・1960年 神学資格取得

1962年よりオーブルダン (ノール県) 中等教育第二段階の教員となる。1965年よりリー

ル・カトリック大学にて哲学の補修授業を受け持つ。

1967年10月、哲学高等教育免状取得

1969年12月 第三過程博士号（指導教官E. WEIL氏）取得（評価・優）『ゴットホルト・エフライム・レッシングに於ける宗教と歴史』

1970年よりリール・カトリック大学にて哲学、特に教育哲学の授業を受け持つ。国家試験の博士論文をパリ第一大学ULMANN氏指導のもと始める。テーマは『ペスタロッチー（1746年～1827年）の活動に見る、自然、社会、教育』。

プロ・ヘルヴェチア財団の奨学生としてチューリッヒに留学。

1978年6月17日 パリ第一大学（ソルボンヌ大学）にて国家博士論文審査。BELAVAL氏、ULMANN氏、SNYDERS氏、GUTH氏、TROTIGNON氏らの審査により、「審査員全員一致の優」の博士号を授与される。

1980年 リール・カトリック大学の文学部・人間科学学部の教育哲学科の教授に任命される。教員養成校（中等教育教員養成機関）と国立教育法育成センターにて教育学を教える。

1987年 教育科学科の大学第二過程（学士過程）を設立、1989年 教育哲学科と教育思想史の大学第二過程（修士課程）を設立する。

1991年 西部カトリック大学（アンジェ教育科学大学院）の教授に任命される。同大学の教育科学部の学部長。リヨン第二大学（リュミエール）学術研究部長。アンジェ教育科学大学院教育・養成研究室の事務局長。教育哲学と教育思想史の指導と研究を行う。

1994年～1998年 コミュニケーション・教育科学大学院（西部カトリック大学）の学長。

1998年 アンジェ教育科学大学院の院長。

2000年 8月～12月 チリのカトリック大学の招待講師。

教育学研究、教職者アソシエーション（A. E. C. S. E.）に所属。

イヴェルドン・ペスタロッチー研究・文献センターの学術顧問。

著作・共著多数。フランスおよび外国の刊行物への寄稿、フランスおよび外国での講演会多数。フランスの大学出版物「教育者と教育 *Pédagogues et pédagogies*」コレクシ

ンおよび Würzburg Ergon 出版社の「*Erziehung, Schule und Gesellschaft*」コレクションの共同管理者。

Würzburg大学（西ドイツ）招待講師、サンティアゴ・カトリック大学（チリ）招待講師、中央アフリカ・カトリック大学（ヤウンデ・カメルーン）招待講師。

2005年5月より 西部カトリック大学（アンジェ教育科学大学院）名誉教授

著作

Pestalozzi ou la naissance de l'éducateur. Etude sur l'évolution de la pensée et de l'action du pédagogue suisse (1746-1827), P. Lang, Berne, 1981, coll. des Publications Européennes, Série XI, v. 105, 671 p.

『ペスタロッチー、教育者の誕生。スイス（1746年～1827年）の教育思想と教育実践の発達についての研究』1981年、ヨーロッパ出版コレクション 6巻。

Pestalozzi : Comment Gertrude instruit ses enfants, nouvelle traduction de l'ouvrage de 1801 avec introduction, table chronologique, notes et index, Castella, Albeuve (Suisse), 1985, 240 p.

『ペスタロッチー／ゲルトルートはいかにしてその子らを教えるか、1801年度版の新翻訳』の序文と年表、解説、巻末索引。Castella, Albeuve出版（スイス）、1985年、240頁。

Pestalozzi : Lettre de Stans, traduction de l'oeuvre de 1799 avec introduction et table chronologique, Ed. du Centre de Documentation et de Recherche Pestalozzi d'Yverdon (Suisse), 1985, 60 p.

『ペスタロッチー／シュタンツだより、1799年翻訳』の序文と年表、イヴェルドン・ペスタロッチー文献研究センター出版（スイス）、1985年 60頁。

Pestalozzi, monographie illustrée, Coeckelberghs, Genève (version française) et Schweizer Verlagshaus, Zurich (version allemande), 1987, 148 p.

『ペスタロッチー』図入り個別研究、ジュネーヴ Coeckelberghs（フランス語版）、チューリッヒ Schweizer Verlagshaus（ドイツ語版）1987年、148頁。

Rousseau, monographie illustrée, Coeckelberghs, Genève (version française) et Schweizer Verlagshaus, Zurich (version allemande),

1988, 159 p.

『ルソー』 図入り個別研究, ジュネーヴ
Coeckelberghs (フランス語版), チューリッヒ
Schweizer Verlags-haus (ドイツ語版)
1988年, 159頁。

Fröbel. Pédagogie et Vie, A. Colin, coll. Bibliothèque
Européenne des Sciences de l'éducation, 1990,
176 p.

『フレーベル, 教育と人生』 ヨーロッパ教育科
学図書館コレクション 1990年 170頁。

*Pestalozzi : Mes recherches sur la marche de la
nature dans l'évolution du genre humain* (1797).
Introduction, traduction et commentaire, Payot,
Lausanne, 1994, "Etudes et documents", 290 p.

『ペスタロッチー・人類の発展における自然の
歩みについての私の探求 (1797年)』の序文,
翻訳, 解説。ローザンヌ, 1994年, 「研究
と文献」290頁。

Pestalozzi, P. U. F., coll. "Pédagogues et pédagogies",
1995, 128 p.

『ペスタロッチー』 「教育者と教育」 コレクシ
ョン, 1995年 128頁。

*Qu'est-ce que la pédagogie? Le pédagogue au
risque de la philosophie*, ESF, coll. Pédagogie /
outils, 2001, 122 p.

『教育とは何か? 哲学の脅威にある教育者』,
「教育・道具」コレクション, 2001年 122
頁。

Avec J. Houssaye, Daniel Hameline et Michel Fabre
: *Manifeste pour les pédagogues*, ESF, coll.
Pratiques et enjeux pédagogiques, p. 48-72 :
《 Sciences de l'éducation ou sens de
l'éducation? L'issue pédagogique 》, 2002.

J. Houssaye, Daniel Hameline Michel Fabreとの共
著で『教育者のためのマニフェスト』 「教
育者の実践と焦点」 コレクション, 『教育
の科学と教育の意味, 教育学の解決法』
2002年。